

三年間の「多様性」：序文

アンニャ・ホップ

はじめに

立命館大学国際言語文化研究所に所属しているジャパノロジー研究会が2000年度から現在にいたるまで、どういう研究活動をしてきたのかをこの特集で発表することとする。

ジャパノロジー研究会の一つの特色は「多様性」という切り口で掴むことができる。この「多様性」は欧米における「日本学」の在り方をよく象徴しているところもあり、「日本学」は独自の方法を持たず他の学問の方法に依存しているのが実状である。

しかしながら、視座を変えてみると、この「多様性」はジャパノロジー研究会の会員やゲストスピーカーは色々な意味で「多様性」を持っているからこそ「日本」を焦点にしている自分たちの研究分野である「日本学」への理解やアプローチの拡大、新たな観点を広げるための大きなチャンスとして理解することもできる。そこで会員やゲストスピーカーはこの「多様性」を問題意識の一つとして「日本」のことを議論の対象にしたことも共通点の一つとして挙げられる。ジャパノロジー研究会の会員やゲストスピーカーは日本も含めて多国籍かつ多言語であって、大学での立場も大学院生、研究生、非常勤講師から常勤講師、専任助教授や教授それに大学以外で活躍するジャーナリストや美術館研究員までに及んでおり、それぞれの研究歴も様々である。そういう人たちによって「日本」を多様な視点をいれながら議論することは、本来「日本学」という学問の限界を超えるための有効な手段であると確信している。

この研究会は現在も活動中であるので、今回の特集はあくまでもワーク・イン・プログレスのようなものとして理解していただきたい。先に述べたように研究対象が「日本学」という非常に幅広い分野であることやそれぞれの会員やゲストスピーカーの研

究内容がかなり多様でもあるため、ジャパノロジー研究会自体も、この特集に掲載している論文も一つにまとめるにくいところがあり、この特集は研究会の最終的な報告とはしがたい。むしろ中間報告の形を取ったいくつかの問題提起と言うべきであろう。

本稿では先ずこの「まとまりにくさ」にチャレンジし、ジャパノロジー研究会はどんな趣旨でどういう経緯から成立したのかを述べたい。その後、具体的にどんな活動をしてきたのか、この特集で集まった論文はその研究活動の中でどのように位置付けることができるのかを述べたい。そして最後に、3年間にわたって議論してきた問題やそれらの共通点に触れたい。

ジャパノロジー研究会に関わっている全員がそれぞれの毎日の忙しさに追われているにも関わらず、限られた時間の中で、この特集を組むことができるのは奇跡に近いというのが正直なところである。本稿に入るまえに、この場を借りて、代表者の先生たち、会員の全員、報告者やゲストスピーカーたち、論文を寄稿してくれた人たちに加えて、立命館大学国際言語文化研究所の諸先生及びスタッフの皆さんによる最初の段階から今日に至るまでの温かい協力に深く感謝したい。

(1) ジャパノロジー研究会の出発点

立命館大学に在職する外国人教員のほとんどは「日本学」(ジャパノロジー、ジャパニーズ・スタディーズ)を専攻している。この日本在住の「日本学者」たちはこの「日本」の何かを研究対象としていながら、他方では日本での生活を日常生活として受け入れている。このことが自分の学問である「日本

学」への理解にどう影響するかという問題意識が会員全員に常にあることは間違いないだろう。その実状と自分たちの研究をどう理解すれば良いのか、それが研究にどう反映してくるのかということをも他の同じ状態に置かれている研究者とだけではなく、海外で活躍する「日本学」や日本の専門家とも交流する必要があると感じたことが研究会発足の趣旨の一つである。上下関係、業績、大学の中の身分やキャリアなどに全くとらわれず自由に研究対象について議論できる場、文字通りコミュニケーションできる交流の場を求めていたのである。

具体的な分析資料として取り上げた英国の監督グリーンハウエイが日本文化を題材にして撮った『枕草子』(Peter Greenaway: *The Pillow Book*, 1996年)¹¹という映画もこの研究会の創立のもう一つの切っ掛けとして挙げることができる。この映画は「日本学」の中ではほとんど論じられてこなかったが、「日本文化」について考察するに当たり、グリーンハウエイ監督の映画を取り上げることで、様々な問題提起が可能となろう。この映画は清少納言の『枕草子』にあらわれた伝統的美学だけではなく、東洋美術の中の日本、とりわけ書の伝統をも視野に入れ、「美と暴力」など、20世紀における日本と「アジア」、とりわけ欧米との関係を問題にしている。その映画における「多文化」を表象および表現の観点から考察し、そのデジタルな映像表現を情報化社会における文化として解釈してみることにした。欧米における本来の「日本学」では研究対象としていわゆる高尚文化に属している「テキスト・文獻」(古典・近代・現代文学、歴史的な文獻資料等)を取り上げている場合が多い。これに対して『枕草子』という映画だけではなく、マンガ、美術及び美術館における「日本」、音楽、大衆文学、マスコミ、日常生活や日常性に関するテーマ等をジャパノロジー研究会の中で問題とすることにした。それぞれは、従来「高尚文化」に集中しがちな「日本学」の議論をめぐる高尚文化対大衆文化(High vs. Low Culture)を問題として議論する場を設けることがもう一つの趣旨であったからである。

(2) 2000年～2002年：研究過程や具体的な活動

2000年度から現在にいたるまでジャパノロジー研究会で行なった研究活動のほとんどは「報告」という形で進めていったのであるが、そこで先に述べたような「多様性」のあるそれぞれの報告者たちの分野の幅広さの中から、共通する問題点を見出すために、毎回必ず議論する時間を設けた。その際、報告と議論をほぼ同じ時間配分で行ない、ここで生まれる文字通りの交流の場そのものを非常に大事にした。「報告」と「議論」という形はそれぞれの報告のためのまとめの機会であると同時に問題提起の拡大に大きく役に立つ手段にもなった。

この研究会が「交流の場」「架橋」であるという趣旨からより多くの日本人研究者が議論に参加できるようにつとめた。報告が外国語でなされるときは会員が日本語への通訳あるいは日本語での要旨説明を行なった。

3年間にわたって行なった研究活動は二つの大きなテーマに分けることができる：1) グリーンハウエイ監督の映画『枕草子』から始め、視覚文化に関する議論と2) 「日本学」に利用できる方法についての問題に関する議論である。専門研究だけではなく、視点をさらに広げて、オリエンタリズム論、ジェンダースタディーズ、ポスト・コロニアリズム、カルチュラル・スタディーズ等が提供してきた観点、如何に「日本学」へ適用できるのかということも常に議論の題材とした。この二つのテーマが多重的な相互関係をなし、それらのからみ合いは本来の「日本学」のなかではほとんど問題にされなかったとも言えるであろう。研究活動の進め方は直線的で行なうのではなく、相互的なからみ合いとして理解した方が正確であろう。よってこの研究会の報告の進展や組み合わせ方も、3年間にわたって蜘蛛の巣のように糸を編みながら発展してきたのである。

2000年度はまず英国の監督グリーンハウエイが日本文化を題材にして撮った映画『枕草子』を中心に進められた。先にも述べたようにこの映画は「日本学」の分野でほとんど論じられなかったが、学際的な日

本研究の可能性を検討するに当たって、極めて多くの問題点を提示するものである。

そこで具体的に取り組んだのはジャクリーヌ・ベルント氏²⁾の報告《グリーンハウエイ監督の基本的なモチーフとフィルモグラフィ》と、田中慶一氏の報告《P. グリーンハウエイ『枕草子 (The Pillow Book)』にみる「アジア」／「日本」³⁾》である。さらにこの映画と「日本学」との関連を中心に詳しく述べているのがベティーナ・ギルデンハルト氏の本特集に所収の論文《「記号」としての日本?—ピーター・グリーンハウエイ監督「The Pillow Book」と「オリエンタリズム」という落とし穴》である。

それから、さらに視点を広げて、視覚文化に関する、写真、日本美術、マンガ、テレビ、サイボーグについての報告が2000年度中に行われた。

日本の現代写真についての報告でフェルディナント・ブリュッゲマン氏⁴⁾の《日本写真研究とジャパノロジー》で明らかになったのは、日本の近代・現代写真に注目しているヨーロッパの写真史家の観点からみて、「日本学」はもっと視覚文化、特に写真についてより専門的な方法で取り上げる必要があるということであった。特に現在、活躍している若い日本の写真家の作品をきちんと理解するためには、日本の現代社会における実状やコンテクストについて情報がなくと不可能であるということであった。ブリュッゲマン氏の報告では「日本学」からの問題提起、議論の交流、資料の手配などに異分野提携を求めた際、例としてホンマ・タカシ作の『Tokyo Suburbia』が挙げられた。

引き続き行なわれた日本美術史の報告でもこの問題点に触れられている。メラニー・トレーデ氏⁵⁾による《北米におけるジャパノロジーとビジュアル・カルチャーの研究—日本美術史を中心に》という報告は本来の美術史の分析方法を超える社会的背景、コンテクスト、ジェンダー論、高尚文化対大衆文化 (High vs. Low Culture) などを研究に入れながら進めたものである。奈良絵本という例を挙げて、ここに見られる描写の相違は絵画のフォーマット、依頼者と画家とのそれぞれの違う社会的身分や相互関係などにも影響されているというもので視覚文化をめ

ぐって、従来の美術史の作品分析の限界を超える新しい視野を開くものと言えるであろう。

カーン・トリン氏⁶⁾による《ベルリン東洋美術館—その再開館をきっかけに》は報告者の博士論文のテーマである谷文晁 (1763-1840) の真景図についての紹介に加えて、視覚文化を美術館という現場で取り組むことについて論じている。欧米にある東洋美術館のなかでの「東洋」の一つの国である「日本」は隣国とどういう関係にあるのかという問題は常に展示の仕方によって、どういうふうに表示できるのかということも考慮に入れなければならない。物質的な芸術作品を通じて「日本」はどのような姿で現れるのかという課題についても論じている。

マリー＝ルイーゼ・ゲルケ氏⁷⁾《ドイツのテレビ放送に見る「日本」》という報告は視覚文化の一つであるテレビを取り上げた。ドイツのテレビ放送が発信する「日本」のイメージはハイテクによる匿名のイメージ対神秘的なオリエンタリズム的なイメージの間の極端なステレオ・タイプとしてしか分析できないということに注目した。ここでは欧米における「日本学」の全くの無関心はどうすれば改めることができるかという問題が中心であった。

2000年度の最後の報告者としてシャリリン・オーバ氏⁸⁾《現代日本の大衆文化におけるサイボーグの系譜 (Genealogy of Cyborg in Modern Japanese Culture)》の中では最近のジェンダースタディーズ論を取り入れながら、大衆文化を中心にジェンダー、性欲、テクノロジーの観点からサイボーグという現象を分析した。

これらの議論の一つの結果として浮かび上がったのは、海外における「日本学」としての学問の拡大や見直しについての考察で、方法論的な新たな考察の必要性であった。中心となったのは、学問の由来にも関係しながらその極限でもある「国」や「近代」の捉え方を深めることであった。具体的な視覚資料の分析だけではなく、理論的な枠組みを確立するために、シカゴ派のハルトゥーニアン⁹⁾の最新の著作⁹⁾を分析することで、理論的な議論を中心に置いた。

このテーマに具体的に注目したものとして筆者の

報告《「日本学」とは何か？—H. Harootunianが引き起こした「日本学」の再検討について¹⁰⁾》とシュテフィ・リヒター氏の《モダン・アイデンティティと消費文化—日本のケース¹¹⁾》が詳しい。前者はハルトゥーニアン氏¹²⁾が述べている北米の「日本学」の政治・社会・歴史的な背景に照らしながら彼が西洋中心的なイデオロギーの根本にある「国」の概念を超えるために「日常性」という概念を提示していることに注目した。(詳しくは、本特集に掲載されている筆者研究ノート《組上の「日本学」—ハルトゥーニアン著「History's Disquiet」とそれにおける今和次郎について》を参照)。

シュテフィ・リヒター氏の《モダン・アイデンティティと消費文化—日本のケース》では、まさに「日本学」へもっとカルチュラル・スタディーズをという問題提起でドイツにおける「日本学」という学問の限界やこれからの課題が論じられた。ドイツの「日本学」の変化や実状を紹介をしたのち、「文化」という概念の拡張を提案している。現実の特定のもの・特定の範囲や部分を指示するのではなく、社会・現実そのものを「意義づけ」の視座から検討することを述べている。この「文化の転換」(cultural turn)から生じる新しい文化史を「日本学」にもっと取り入れる必要があるというのがこの報告での主な主張であった。

2000年度に引き続き、2001年度も視覚文化に関するマンガ論を研究対象にしている。報告はシュテファン・ケーン氏¹³⁾の《漫画の源流とは何か—江戸時代における「絵画文学」の再検討へ》やベルント氏の《マンガの不／可視—「裸」を例に》であった¹⁴⁾。

ケーン氏は「日本学」の出発点として江戸文学を専門にしているのであるが、報告では国文学の視点から江戸文化の視覚的資料を分析し、マンガの系譜への影響源として考えることができるかどうかについての徹底的な検討を加えた。

ベルント氏は「美学」「マンガ論」「現代美術」「日本学」という幅広い分野で研究活動が続けているが、この報告はマンガの中に表現されている不／可視—「裸」に関して分析したものである。

チャン・チアニン氏の《「翻訳」ということ¹⁵⁾》という報告は、「日本学」が伝統的に扱っている翻

訳作業に注目した初めての報告であった。翻訳の作業で原語から目的言語への変形過程に関する問題点に触れている。

マルテ・ヤスパーセン氏の《耳のための映画—ラジオ番組のテーマとしての日本¹⁶⁾》という報告は「日本文化」をドイツのラジオで紹介するという視覚的なテーマを聴覚的に変える作業で、ありふれたステレオ・タイプに留まらず、「日本のイメージ作り」を聴く側に任せることにしているが、発信者としての偏見をさらに強調するのではなく、多重的な「日本文化」の紹介に務めているという報告であった。

引き続きオールウィン・スピーズ氏の《駅前留学と在日外国人の日本学》やベティーナ・ギルデンハルト氏の《概念の動き：日本の文芸界における「純文学」と「大衆文学」¹⁷⁾》ではそれぞれの博士論文のテーマを紹介の《概念の動き：日本の文芸界における「純文学」と「大衆文学」》ではそれぞれの博士論文のテーマを紹介しながら、それぞれの報告で「日本学」の根本的な研究作業に焦点を合わせた。

スピーズ氏の博士論文は日本の少女マンガについてだが、この研究に当たって、研究者の立場、また方法を考慮する必要性に関して述べた。この課題はジャパノロジー研究会の趣旨の一つでもあった在日外国人であることの「日本学」への影響や問題意識に密接に関係する内容で、この特集に掲載されているスピーズ氏の論文《Disciplinary Migrations and Paradigm Shifts: Area Studies in a "Global" Context》のなかでさらに詳しく述べられている。

ギルデンハルト氏は博士論文で日本文芸界における「純文学」のための芥川賞と「大衆文学」のための直木賞が制定された歴史的背景を考察した。「純文学」と「大衆文学」の歴史性に触れて、論文の基本的作業である概念の検討に注目した。

3年目である2002年度は、「日本学」は学問であるかどうかという議論についても触れながら、ここで特に注目したのは「日本学」と研究者の出自や研究場所との関係、「日本学」独自の方法の有無、他の学問分野の手法をいかに活用できるかという問題であった。それに加えて会員やゲストスピーカーの

ほとんどは研究者だけではなく教員の仕事も持っているということから、教育的な観点も議論に加えた。この中で、自己理解と他者理解や視点の転換の必要性がさらに不可欠であることが強調された。

教育の現場に適用できるオールトン・D・コール氏の《Action Research: An Insiders View》¹⁸⁾ という報告ではこの方法を教育改善方法として紹介している。研究グループで適用できる方法であるが、本研究会に関わっている会員にも教育現場の改善のために大きなヒントを提供している。

江戸時代の近世写本文化での歴史に関するピータ・コルニツキ氏の《近世写本の文化》¹⁹⁾ の報告は江戸時代の文化は印刷文化であるという通説に対して、最近研究している江戸時代の文献収蔵のなかに驚くほど多数の写本が残っているという新しいテーマを紹介している。

今年度は視覚文化に加えて聴覚文化についての報告も行なった。山根宏氏の《歌謡曲にみる性意識の変化—1960年代と1970年代の歌謡曲》²⁰⁾ という報告である。歌謡曲の歌詞の分析を通じて、戦後の性意識の変化を探った。戦後の日本における恋愛の肯定、恋愛結婚とセックスを結びつける「ロマンチック・ラブ・イデオロギー」の普及と定着、欧米の「性革命」の影響と「ロマンチック・ラブ・イデオロギー」の破綻（60年代後半）や結婚しない人たちの増加（70年代）という社会現象が歌謡曲にどう反映しているかを紹介した。この報告は特集に同題で掲載されている。

これから開催予定の報告はイングリト・プロコップ氏²¹⁾ 《「日本学」と日本における真珠産業》で、「真珠産業」という博士論文のテーマを紹介することで、経済史的な視点だけではなく、「日本学」からの位置付けの紹介も期待できる。この特集の掲載論文《The Japanese pearl industry, rise and fall of an industry》で詳しく述べられているように真珠産業は日本でもっとも古い産業の一つであり、報告ではその歴史に触れ、最近の真珠産業の不景気によって真珠産業地域で起こっている大きな生活変化と真珠産業をめぐる偏見やイメージ（真珠＝海女という神話など）の明確化を試みている。

さらにグドゥルン・グレーヴェ氏²²⁾ の《応援団について（その2）—なぜメンバーを引き付けるか？ アンケートの分析—》も予定されている²³⁾（本特集に所収）。応援団でとったアンケートをもとに経験的事実を分析する。応援団で保たれている上下関係は先輩・後輩制からなるのであるが、これは西洋的な観点で取り上げられるかどうかという問題について論じる。欧米ではほとんど知られていないこの応援団をステレオ・タイプとして描くのではなく、この現象は如何に「日本学」の観点から理解すれば良いのかについて幾つかの手がかりを提示している。

その他にジャパノロジー研究会は他の研究会との共同開催という形でおこなった報告も開催した。この研究会が交流の場であるためには学際的なアプローチも大きな意味があると考えたからである。具体的に行なったのはスタンカ・ショルツ・チョンカ氏《野田秀樹の「パンドラの鐘」における風刺と諧謔》²⁴⁾、メリサ・ウェンダー氏《在日文学とジェンダー》²⁵⁾、フェイ・クリーメン氏《台湾における植民地文学》²⁶⁾ やスミエ・ジョーンズ氏《見え隠れするジェンダー》²⁷⁾ という報告である。

(3) 終わりに：研究活動とはコミュニケーションである

3年間にわたって現在も続くジャパノロジー研究会は「日本学」の枠組みとぶつかりながら様々な分野についての議論や主張を重ねてきた。

多くの報告は本来「日本学」でほとんど扱っていない視覚資料を研究対象にしていた。奈良絵本、江戸時代の写本文化、江戸時代の絵画、江戸文学における絵画物語をマンガ論と結んだり、マンガ論の中の「身体」への検討を探ったりして、写真史、映画に撮られた「日本」、テレビやラジオ放送で発信される「日本」、美術館の中の「日本」まで資料の分析だけではなく現場にまで及んだ報告もあった。そこに加えて資料分析より現代日本の社会に直接関係している歌謡曲に反映されている男女関係、応援団という現象、サイボーグや真珠産業についての議論もあった。従来の「日本学」の大きなテーマである

「テキスト・文献」についても翻訳の作業から、文学の歴史や概念自体にも注目している報告がなされた。「方法」という問題に関して新たな比較概念である「日常性」から「日本学」という学問への再検討作業にまで議論が及んだ。「日本学」は本当に一つの独立した学問として捉えて良いのかという問題は今回の研究会で大きく論じられた共通点の一つである。

共通の根本的な問題意識と具体的な資料分析を組み合わせて報告の形で行なわれている議論の一つの成果として、スピーズ氏の報告「駅前留学」が象徴しているように、自己理解-他者理解という問題を常に意識していなければならないという認識を挙げることができる。ここでは自分の生活環境を意識することだけではなく、研究が「コンテキスト」の中で行なわれていることも忘れてはいけない。

いまや「コンテキスト」を見失いがちな象牙の塔の中の孤独な研究という方法は、少なくとも圧倒されるほど広大な分野を扱っている「日本学」にとってはあまり適切でないことがはっきりしてきている。考察や研究という作業が現在に意義あるものであるためには、具体的なテーマについての議論を重ねることで、問題提起に必要な確認作業による新たな疑問の働きかけが不可欠である。

固定した「結果」を目指すよりも有機性のある、柔軟でなおかつ創造的な「認識過程」が要求することは実践的な研究態度であることもこの研究会の活動で明確になっている。要するに学問とはコミュニケーションであるということである。だからこそ、この研究会の趣旨の一つであった「交流の場」というコンセプトはこれからの研究活動のために求めたいところである。《欧米大学制度における分野としての「日本学」の再検討—文化論を中心に》というテーマを出発点としたモットーは3年後である現在も、またこれからも有効性を失わない。

最後に、会員一同この特集がこれからの「日本文化」を研究対象にする研究者たちに国籍を問わず少しでも役立つことができることを希望していることを述べておきたい。

注

- 1) 『ピーター・グリーンウェイの枕草子』（字幕版）、VHS (NTSC) 1998, バップ。
王愛美, 『「ザ・ピロブック」映撮日誌』1997, 清水書院。
Woods, Allen: *Being Naked Playing Dead. The Art of Peter Greenaway*. Manchester University Press 1996.
- 2) 2000年6月8日開催。BERNDT, Jaqueline, 横浜国立大学教育人間科学部助教授。
- 3) 2000年12月14日開催。田中慶一: 立命館大学社会学研究科修士課程修了。関西在住のフリーライター。
- 4) 2000年5月11日開催。BRÜGGEMANN, Ferdinand: 写真史家。近代・現在写真を専門に扱うケルンのGALERIE PRISKA PASQUERに勤務。
- 5) 2000年6月29日開催。TREDE, Melanie: ニューヨーク大学美術史学部助教授。
- 6) 2000年11月8日開催。TRINH, Khanh: ベルリン東洋美術館研究員。日本美術史担当。
- 7) 2000年6日開催。GÖRKE, Marie-Luise, ベルリン在住。メディア研究者・ラジオ作家。
- 8) 2001年3月7日開催。ORBAUGH, Sharalyn. ブリテッシュ・コロンビア大学準教授。
- 9) Harootunian, Harry W., *History's Disquiet: Modernity, Cultural Practice, and the Question of Everyday Life*, Columbia University Press, New York, 2000. 研究会で特に注目していたのは第1章: 1. Tracking the Dinosaur — Area Studies in a Time of "Globalism", 25-58頁。
- 10) 2001年6月22日開催。HOPF, Anja: 立命館大学文学部常勤講師。
- 11) 2001年10月20日開催。RICHTER, Steffi: ライプチヒ大学東アジア研究所所長・日本学科専任教授。
- 12) 文献は注10を参照。
- 13) KÖHN, Stephan: フランクフルトのヨーハン・ヴォルフガング・ゲーテ大学日本学科講師。(当時立命館大学文学部客員研究員)。
- 14) 両発表は2001年5月12日開催。
- 15) 2001年7月26日開催。Chia-Ning CHANG: UC Davis東アジア学部教授。
- 16) 2001年12月14日開催。JASPERSEN, Malte: ラジオ・プロデューサー。立命館大学経営学部常勤講師。
- 17) 2002年1月12日開催。SPIES, Alwyn: 立命館大学法学部常勤講師。GILDENHARD, Bettina: 立命館大学産業社会学部非常勤講師。
- 18) 2002年10月17日開催: COLE, Alton D.: 立命館中学校教諭。
- 19) 2002年4月5日開催。KORNICKI, Peter: ケンブリッジ大学教授。
- 20) 2002年7月24日開催。山根宏: 立命館大学政策科学部教授。
- 21) 2002年11月21日開催予定。PROKOP, Ingrid: 立命館大学政策科学部常勤講師。
- 22) 2002年12月開催予定。GRÄWE, Gudrun: 立命館大学経済学部助教授。
- 23) この論文は2部からなるもので、第一部はグレ

- ーヴェ・グードルン：「応援団についてーキャンパス・ライフに不可欠の団体か奇妙な遺物か」, 国際言語文化研究所紀要, 第14巻, 2号, 2002年9月, 187-197頁に掲載されている。
- 24) 2002年3月11日, 立命館大学アート・リサーチセンターの京都演劇・映像デジタルアーカイブプロジェクトと共催。SCHOLZ-CIONCA, Stanca: トリアー大学日本学部教授。
- 25) 2002年5月21日, ジェンダースタディーズ研究会と共催。WENDER, Mellisa: ベイツ大学日本学部助教授。
- 26) 2002年6月6日, 共生と多様-普遍性研究会と共催。KLEEMAN, Faye: コロラド大学東洋言語文化学部教授。
- 27) 2002年7月15日, ジェンダースタディーズ研究会と共催。JONES, Sumie: インディアナ大学東洋言語文化学部教授。